

良かれと思つて尽くしてくれてる

根暗 歪んだ愛の
隣人の執着心で

ねっとりクンニ
で

大量中出し

ド変態レイプ

される話



良かれと思っ
て尽くしてく
れる根暗隣
人の歪んだ
愛の執着心で
ねっとりク
ンニ大量中
出しド変態
レイ
プされちゃう
話

結葉（ゆいな）…中小企業で働く事務職。木造二階建てのアパートの奥の角部屋に住んでいる。残業が多く、帰宅するのは遅い。仕事と家の行き来ばかりで自炊は滅多にしない。毎晩コンビニ弁当で、休日は出前かコンビニ弁当。

亜紀斗（あきと）…180cm、28歳くらい。在宅ワークで家にずっといるらしい。手先が器用。声が低く、物腰柔らかい話し方。

月曜日、私は死んだ目でコンビニの自動ドアを抜けた。

コンビニのビニール袋が指に食い込む。中身は唐揚げ弁当とストロング系のチューハイ。月曜日なのに、味とか栄養とか考える気力もなくて明日もどうせ同じもの買ってる気がする。

アパートの階段を登り切った所で、ちょうどゴミ捨てに出てきた隣人さんと目が合った。「お疲れ様です」とだけ言われて、会釈して部屋に入っ

た。

次の日の火曜もまた会った。今から向こうはコンビニに行くのだろうか。私は相変わらずビニール袋を手を持っていた。

「今日も遅いんですね」

「まあ、はい……」

私はなんと言ったら良いか分からず苦笑いで返した。それから木曜も金曜も、この一週間で四回は顔を合わせている。仕事帰り、ちょうど22時前後。向こうも家にいる時間が合うんだろう、在宅ワークだって前に立ち話で聞いた事があるようなないような…。在宅なら、そりゃ生活リズムも自由だよな、なんて思っていた。

帰宅時間が微妙に違うはずなのに、いつも会っている気がする。偶然にしては、ちょっとタイミングが良すぎる気もするけど——まあ、隣同士だし。そんなものかな、って。



「あ、お帰りなさい」

その次の週、階段を登り切ると隣人さんが立っていた。いつも通り、輪郭のぼやけたような声。廊下の電気がちよつと暗いせいもあって、一瞬びっくりもしたし、相手の表情まではよく見えない。でも多分、笑っているんだと思う。少なくとも、そういう声のトーンだった。

「あ、はい……ただいま、です」

赤の他人に「ただいま」って変だな、と思いながらも、反射的に口から出た。会釈だけして通り過ぎようとした。すると。

「これ、よかったら」

小さいタッパーを差し出された。湯気はもう立ってないけど、ラップの内側がまだうっすら曇っている。さっきまで温かった証拠だ。

「え、いいんですか……？」

「作りすぎちゃって。一人だと、なかなか減らなくて」

「ありがとうございます……」

タッパーを受け取ると、思ったより重かった。隣人さんは小さく頷いて、それだけでドアの向こうに引っ込んでいった。会話らしい会話は、多分二分もなかったと思う。

自分の部屋に入ってタッパーを開けると、肉じゃがだった。味も染みてそうなジャガイモがごろごろ入っていた。コンビニ弁当が入った袋を冷蔵庫にしまって、頂いたタッパーを電子レンジの中に入れて温める。

（…良い匂い…今日はこっち食べようっと）

人が作った料理が久々で少しだけ心が躍った。



翌朝、私は洗って乾かしておいたタッパーを持って、隣の部屋のチャイムを鳴らした。少し間があって、ドアが開く。

「あ、おはようございます。」

「おはようございます。朝からすみません…あの、これ、昨日の。ありがとうございます」

タッパーを両手で差し出すと、隣人さんは少し目を丸くしてから、ふにゃつと表情を崩した。

「わざわざすみません」

「いえ…。あ、あの！昨日の肉じゃが、めちゃくちゃ美味しかったです。天才ですか？」

半分冗談みたいに言ったつもりだったけど、隣人さんは一瞬きょとんとしてから、耳の先まで赤くしてうつむいた。

「そんな、天才って……大したもの作ってないですよ」

「いや本当に。なんか、お店の味っていうか」

「……喜んでもらえたなら、良かった」

そう言って、少し照れくさそうに笑う。その笑い方が、なんだか子供っぽくて、思わずこっちまで笑ってしまった。

「いつも、コンビニ弁当ですよね」

ふと、隣人さんが言った。

「あ、ばれてます…？自炊する気力なくて」

「無理しなくていいと思いますよ。でも、栄養とか偏っちゃうと心配で」

「え、優しい…ありがとうございます」

少し照れくさくなって、私はもう一度頭を下げた。

「本当にありがとうございます。」

「いえ、そんな…」

「今度お礼をさせていただきますい！」

「いやいや、そんなお礼だなんて…」

隣人さんは少し言葉を選ぶように間を置いてから、控えめに続けた。

「あー…じゃあ、もし良ければなんですけど、連絡先、交換しません？毎回チャイム鳴らすの、なんだか気を遣うかなと思って。何か作りすぎた時とか、先に連絡できたら楽かなって」

「ええ、これからお裾分け貰えるんですか!? やったー! もちろん交換しましょう!」

隣人さんはほっとしたような、少し嬉しそうな顔でスマホを取り出した。QRコードを読み込んで、友達追加の通知が鳴る。たったそれだけのことなのに、隣人さんは画面を見つめたまま、しばらく黙っていた。

「ありがとうございます…結菜…さん。素敵な名前ですね」

「とんでもない！えと…亜紀斗さん…ですね！こちらこそありがとうございます！」

「で、ではまた僕が作り過ぎた時にでも…」

軽くお辞儀をするどアが閉まった。

その時の私は、この何気ないやり取りが、後から思えばひとつの「始まりの合図」だったなんて、想像もしていなかった。

それから、差し入れは日課みたいになった。

平日の夜は、帰ってくるとタイミンク良く玄関先で会う。休日は休日で、朝——それも、私が目を覚まして、カーテンを開けたりし始めた頃合いにLINEが来て、数回やり取りを交わすとチャイムが鳴る。

「朝ごはん、良かったら」

「わ！すごい！朝からこんなに作ってくれたんですか？」

「いえ、自分の分作るついでなので」

亜紀斗さんは私の言葉に照れた様に頬を掻いた。それにしても、ついでは品数が多い気がしたけど、寝起きの頭ではそれ以上考えられなかった。お礼を言ってドアを閉めると、サンドイッチやゆで卵、フルーツ、ヨーグルトなどカフェのモーニングの様な朝食がタッパーに入っていた。私はテーブルとベッドの間に座り、黙々と食べ始める。

ふと頭によぎったのは、ラインのタイミングがバッチリな事だった。まだカーテンも閉めたままの日はLINEは届かない。でも私が起きて、ベランダに洗濯物を干そうとした瞬間とか——そういう「今起きてます」が伝わるようなタイミングでLINEが届く事が多かった。

その日の夕方、何かの流れで友達に電話でこの話をしながら、取り込んだ洗濯物を畳んでスピーカー機能で話をしていた。

「隣の人がさあ、よく晩御飯とか朝ごはん差し入れてくれてて。それがすっごく美味しいの！今朝はデザート付きだったんだ。フルーツヨーグルトで缶詰じゃなくて生のフルーツだったの！」

「え、まってそれ普通に気持ち悪くない？この時代にお裾分け？いやいやないない！」

笑いながら言われて、初めて「あれ、そうなのかな」と引かかった。

「いや、でもいい人だし…。そういう性格なんだと思う」

「それ体液とか入ってたらキモくない？大丈夫なの？チンコとかちよんちよんって付けてたらどうしよう！とか思わないわけ？」

「…え、そんなわけなくない？普通そんな事しないでしょ」

「いや分かんないよ？そういう人は愛憎入り混じるとやりかねないってい

うか。よくニュースでやってるじゃん。同じ職場の同僚の水筒に精子入れてたとか、唾吐きかけてたとか。」

「やめてよ、想像したら食べれなくなるじゃん」

「いやいや、あんたガード緩過ぎ。脇スッカスカだよ？今朝フルーツヨーグルトだっけ？チンカスとか入ってんじゃない？」

「ねえ、本当にやめて」

けらけらと笑って、笑い話のつもりで流したはずなのに通話を切ったあともその話だけがやけに耳に残った。

冷蔵庫を開けると今朝もらったサンドイッチの残りがあった。何の変哲もない、マヨネーズとマスタードがしっかりと塗られたポリウーミーなサンドイッチ。何回もあの人のご飯は食べてきたし、お腹を壊したことも、変な味がしたことも一度もない。だから、大丈夫。大丈夫なはずだ。なのに、ラップを剥がそうとした指が、一瞬だけ止まった。

——大丈夫だよね。

自分に言い聞かせるみたいに、もう一度心の中で繰り返してから、サンドイッチを食べた。変哲のない味がして安心して次の一口を頬張る。でも、その日を境に、私は無意識のうちに、タッパーの中身をじっと観察するようになっていた。

友達の言葉が、頭から離れなかった。

◇

その日の夜またLINEが届いたあとチャイムが鳴った。

「これ、どうぞ」

渡されたタッパーを受け取りながら、私は初めて、笑顔を作るのに少し時間がかかった。

「あ……ありがとうございます」

「今日も肉じゃがです。最近肉じゃがの美味しさに気がついちゃって。」

「は、はい……。美味しくいただきますね。いつもありがとうございます……。」

いつも通りの返事をして、部屋のドアを閉める。すぐに、キッチンの三角コーナーの前に立った。

蓋を開ける。いつもと変わらない、ちゃんと味の染みた肉じゃが。出来立てなのか湯気もちゃんと立っていて、匂いも何もおかしいところはない。なのに、箸を持つ手が動かなかった。

——体液とか入ってたら。

友達の声が、頭の中で勝手に再生される。バカらしい、って思う。あの人はただの親切な隣人で、そんなことするわけがない。今まで何十回も食べてきて、何もなかったんだから。

そう思いながらも、私は肉じゃがを生ゴミ用のポリ袋に滑り込ませた。どちゃちゃと鈍い音がキッチンに広がる。もったいない、とか、失礼だ、とか、頭のどこかでは分かっている。でも、指がそれ以上動かさなかった。

空になったタッパーだけを洗って、シンクの脇に伏せて置く。明日、洗い物として返さなきゃいけない。何事もなかったみたいな顔をして。

——なんで、こんなことしてるんだろう。

自分でもよく分からないまま、私はゴミ袋の口をきつく縛った。

◇

それから差し入れは変わらず続いた。休日の朝のLINEから数回のやり取り、そしてチャイムへ。受け取ったら、部屋のドアを閉めた瞬間に三角コーナーへ直行する。中身を確認する余裕もなく、そのままゴミ袋に流し込む。毎日、だんだんとそれが一連の動作みたいになっていった。

最近では帰りにコンビニで弁当を買って、鞆の奥にねじ込む。共用廊下でばったり会っても、手ぶらのままでいられるように。差し入れされてもタッパーだけは律儀に洗って返した。

その日もいつも通り仕事帰りの22時過ぎ。LINEが数回届いたあと、部屋に着くと同時にチャイムが鳴った。

「お疲れ様です。今日はこれ、良かったら」

差し出されたタッパーを受け取ろうとした瞬間、亜紀斗さんがふっと目を細めて低い声で言った。

「食べてないですよね？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「え…？」

「最近、僕が渡したもの。食べてないですよね」

笑顔のまま、静かにそう言われて心臓が跳ねた。

「な、なんでそんな…ちゃんと、食べてますけど」

「タッパー、いつも綺麗に洗って返してくれますよね。それは、すごく嬉しいんですけど」

亜紀斗さんはそこで言葉を切って、笑顔のまま、少しだけ首を傾けた。

「僕、知ってますよ？捨ててますもんね？」

息が止まった。

「ゴミ袋、見ましたよ。僕の作った料理は小さい袋に入れて、コンビニ弁当のパッケージで囲うように捨ててたじゃないですか。」

淡々とした声だった。責めるでも、怒るでもなく、ただ確認するみたいな口調。それが余計に、背筋を冷たくさせた。

「なんで嘘つくんですか？」

「え、いや食べてますって」

「…昨日のキムチ炒飯も？」

「ええ、もちろん」

「美味しかったですか？」

「当たり前じゃないですか！程よく辛くて、豚の脂とキムチがマッチして

…」

「嘔吐くなよ!!」

急に声が大きくなって、手に持っていたタッパーを床に投げつけた。中身のコロッケが二つ、廊下の床にごろごろと転がる。

「程よく辛くて…？なに言ってるんですか？ありえないくらい甘くしましたよ？砂糖一袋入れて、食べられないくらい甘くしました。なのに程よく辛くて…？」

「あ、いや……その……えと……」

言葉が続かなかった。頭の中が真っ白で、何を言えば正解なのか分からない。ただ、床に転がったコロツケを、亜紀斗さんも私も、しばらく黙って見ていた。

さっきまでの穏やかな声とは、まるで別人だった。笑顔だけは、まだ顔に張り付いたままなのに、目だけがまったく笑っていない。

「僕、毎日ちゃんと考えて作ってるんですよ。なのに、コンビニ弁当？」

「そんな、責められても…忙しいのは本当で……」

「は？忙しい？だからってコンビニ弁当に切り変える理由はないですよねえ？」

低い声だった。責め立てるような、なのに震えているような、その両方が混ざった声。

「僕、毎日ちゃんと栄養バランス考えて作ってるんですよ。塩分だって、あなたの仕事の疲れ方見て調整して。なのに、コンビニ弁当？添加物だらけの、レンジでチンするだけの？」

「そんな、責められても…忙しいのは本当で……」

「忙しいのと、僕の料理を捨てることに、何の関係があるんですか」

言葉を遮るように亜紀斗さんが一歩、距離を詰めてきた。廊下の壁に、背中がぶつかる。

「僕のこと、馬鹿にしてるんですか？」

「ち、違います、そんなつもりじゃ……」

「じゃあ、なんですか。教えてください。なんで！僕の料理だけ！いらないんですか!!」

答えられなかった。喉の奥が、からからに渴いていた。ふっと、憑き物が落ちたみたいに、優しい表情に戻る。

「あ、もしかして」

言葉を選ぶように、一拍置く。

「前に友達と電話で話してたやつですか？体液がどうの、って」

「え…」

血の気が引いた。このアパート、木造だし壁が薄いのは分かっていた。ドアを閉める音がうっすら聞こえることがあるし、時々、下の階の生活音が筒抜けになっているのも、なんとなく感じてはいた。でも、それは

「なんとなく」でしかなくて、わざわざ意識したことなんてなかった。友達との電話も、いつも通りに部屋の中で、いつも通りの声量で話していただけだ。

——聞こえてたんだ、あれ。

「丸聞こえですよ？何かも。もちろんトイレの音も、大人のおもちやで夜な夜なオナニーしてるのもぜ——んぶ、聞こえてました。」

「っ!？」

「ああ、気が付かないとも思いました？そうか、そうですね、僕は生活音に気をつけて生活していたし、あなたは日中仕事で家にいないですから、どのくらいの音が漏れるのかわからないですよね？」

「そ、そんな…」

「1ヶ月はいれてましたよ？精子。あなたを好きになればなるほど、思え

ば思うほど気持ちが高まってちんちんがイライラしてきて…。お米をちんちんで混ぜて研いだり、チンカス混ぜたり、よだれもた〜くさん混ぜましたけど。」

亜紀斗さんの声は興奮を隠しきれていないみたいに少し上ずって顔を赤くしていた。

「なっ…なんでそんなことっ…」

「なんで…？そりゃ、好きだからですよ。それ以外にありますか？テレビ見て笑う可愛らしい声、ドラマ見てわんわん泣いている声も、下品でどうしようもない喘ぎ声出しながらオナニーしてる声を聞いてきて、かわいいな、愛おしいなって思うのは悪い事ですか？だからどうしたらお近づきになれるだろうって思って、よく結菜さんを観察したんです。」

「……っ!!」

私は恐怖のあまり体が小刻みに震えた。

「観察した結果、仕事で疲れて帰ってくる事が多くて、いつも手にはコンビニ弁当。だからこんな生活、誰かが支えてあげなきゃダメだって思ってます。結菜さんは自分を大事にする余裕もないくらい頑張ってるのに、誰も気づいてくれない。誰も、ちゃんとご飯食べてるか、心配してくれない」

「……っ」

「だったら僕が、その“誰か”になろうって。手料理を振る舞えば、少しは身体を気遣ってもらえる。それに――」

亜紀斗さんは、そこで初めて、少し照れくさそうに目を伏せた。まるで、

これまでの異常な告白などなかったかのように。

「毎日ちゃんと三食食べてる結菜さんの方が、絶対可愛いなって思ったので」

その笑顔と、さっきまでの豹変ぶりの落差に、余計に寒気がした。亜紀斗さんの中では、全部が繋がっている。壁越しに聞いていたことも、ゴミを漁ったことも、精液を混ぜたことも——全部、「大切にしたい」という一つの気持ちから、地続きで発生している。

「美味しい美味しいって僕の精子入りヨーグルトを食べたり、」

「……っ、う」

胃の底から、何かがせり上がってくる感覚がした。1ヶ月。今まで食べ

てきた差し入れの全部が、頭の中でフラッシュバックする。

「犬って、飼い主の唾液付きのご飯を食べると懐きやすいって知ってますか？」

にっこりと笑ったまま、亜紀斗さんはそう続けた。

「だから僕も、それを信じてやってみました。僕に馴染んでいくように」
「ッ…！頭、おかしいんじゃないですか」

やっと絞り出せた声は、自分でも驚くほど掠れていた。

「頭おかしい？なにいつてるんですか？ご飯や僕の遺伝子を粗末にする方が…頭おかしいと思いますけどねえ？」

責め立てるような口調が、また戻ってきていた。

「ご飯を粗末に。僕の精子や身体の一部を粗末に扱うんですね」

「……っ、それは、違……」

「許せない」

その一言を境に、亜紀斗さんの表情から一切の余裕が消えた。さらに一歩詰めて私の家に侵入してくる。下駄箱に背中を押し付けられたまま、これ以上下がる場所がなく逃げ場を失った。

「や、やめてくださいっ!!」

「僕がどれだけ、あなたのために時間使って、お金使って、気持ち込めてきたか、全部無駄にしたんですよね」

「ち、ちがつ……そんなつもりじゃ……」

「じゃあ、どんなつもりだったんですか。僕の全部を、ゴミ袋に突っ込んで捨てて。それで、どんなつもりだったって言うんですか」

「っ……」

「はあ、もうわかった。わかったわかった。だったらもう、いいよね。食べ物と僕の気持ちと精子を粗末にした罰。」

ガチャ、と玄関の鍵を閉められて、私の腕を強く掴むと引っ張るようにズカズカとリビングに土足で入られてしまう。

「離して!!やめてっ!!」

「うるさい」

「きゃっ!!」